



昔むかし、あるところに、お百姓ひやくしやうがいて、息子が三人ありました。一番下の息子はヘルムという名前で、少しまぬけでした。お父さんは、ヘルムがばかなことをしてかすたびに、むちでたたいてなおそうとしました。でも、ヘルムはいつだつてばかなことをするものですから、毎日毎日むちでたたかれるはめになりました。

あるとき、村のまんなかに、とつぜん、木が一本はえてきました。それは、これまでだれも見たことがなく、本にもものつていないような木でした。名前もわかりません。

木は、ずんずんのびていきました。二、三日すると、教会の塔とうよりも高くなり、二、三週間たつと、もう木のとっぺんは雲の中に見えなくなってしまいました。村の人たちは、木のまわりに集まって、わいわいがやがやいい合いました。

「この木に登っていったら、どこまで行けるんだろう」
「木のとっぺんは、いったいどうなってるんだろう」

そのうち、ほんとうに木に登っていく人がでてきました。みんな木ぐつを何足も持って、とちゆうではきつぶした木ぐつを下に落としながら登っていきました。でも、ほとんどの人は、二、三日たつともう下りてきました。なかには、目じるしの木ぐつも落とさず、登ったきり二度と下りてこない人もいました。

ヘルムの兄さんたちも登ってみましたが、すぐにあきらめて下りてきました。しばらくすると、木に登ろうとする人はだれもいなくなりました。

ある日のこと、ヘルムが登ってみようといいました。ヘルムは、おとうさんに、「木ぐつを十二足と食べ物をつばいつめたリュックサック、それに鉄のおのを用意してよ」とたのみました。

村の人たちは、みな、ばかにしてわらいましたが、ヘルムは、さっさと登っていきまし

た。

まる一日がすぎましたが、ヘルムは下りてきません。代わりにすつかりすりへってあなの空いた木ぐつだけが落ちてきました。村の人たちは、ぼろぼろになった木ぐつを見てびっくりしました。

それからは、毎日、木ぐつがすさまじいいきおいで落ちてきました。村の人たちは、「あいつ、きつと、どんどん登っていつてるんたろうなあ」といい合いました。

ヘルムは、木から落ちないように鉄のおので体をささえながら、ずんずん高く登っていききました。

何日目かの夜のこと、ヘルムが寝る場所をさがしていると、木にほらあなが空いていて、かすかな光がもれていました。のぞきこむと、ほらあなの中に、おばあさんがひとりすわっていました。おばあさんは、ヘルムが今まで見たことも聞いたこともないほどみにくい顔をしていました。

ヘルムは、ほらあなの中に入って行って、おばあさんに話しかけました。おばあさんはとても親切で、おいしいごはんをごちそうしてくれて、ひと晩泊めてくれました。ヘルムが、

「木のてっぺんまであとのくらいかかるんですか」とたずねると、おばあさんはいいました。

「そうだねえ、ぼうや。まだだいぶ遠いよ。わたしはまだ月曜日だからねえ。おまえはこれから火曜日のところへ行き、つぎに水曜日のところへ行つて、そのあとじゅんじゅんに、土曜日のところまで行かないといけなんだ。でも、土曜日のところまで行ったら、てっぺんまではもうすぐだよ」

つぎの日、ヘルムはまた登っていき、ようやくつぎのほらあなに着きました。

そのほらあなにも、おばあさんがひとりすわっていました。おばあさんは、前のおばあさんよりもつとみにくい顔をしていました。ヘルムはびっくりして木から落っこちそうになりました。

おばあさんは、ヘルムに晩ごはんをごちそうして、ひと晩泊めてくれました。

つぎの朝、ヘルムが出かけようとすると、おばあさんは、

「わたしは火曜日だがね、水曜日に似ていなくてほんによかったと思うよ。水曜日とき

たらとてもまともに見られるような顔じゃないんだよ」と忠告してくれました。

それで、ヘルムは水曜日のほらあなをうまくよけて登っていきました。

ところが、木曜日のおばあさんときたら、もっとずっとみにくい顔をしていたのです。

ヘルムはじつとがまんして、金曜日のおばあさん、土曜日のおばあさんと、つぎつぎに会っていきました。

土曜日のおばあさんにわかれをつけて少し登ったところで、さいごの木ぐつがすりへってだめになりました。鉄のおも刃がすっかりかけてしまいました。けれども、いまさら引き返すことはできません。しかたなくまた一生けんめい登っていきました。

とつぜん、石のかべにつき当たりました。かべにはへこみがあつて小さなドアがついていました。ドアを開けると、なんと、大きな野原が広がっていました。

ドアを開けたとたん、ヘルムはおなが空いて気をうしない、草の上に丸太のようにたおれてしまいました。

気がつくと、目の前にたくさん美しい木が植わった庭があり、そのむこうにお城が見えました。

(あんなりっぱなお城だもの、きつとすばらしいごちそうを出してもらえらるうなあ)

ヘルムはそう思つて立ちあがると、お城にむかつて歩きだしました。

しばらく行くと池があつて、池のほとりに、いやらしい大きなアマガエルがいました。

アマガエルはヘルムにむかつて、

「長いことあんたを待つてたんだよ。あんたしか、わたしをすくうことができなんだから」といいました。ヘルムが、

「いったいどうしたらおまえをすくうことができるんだい」とたずねると、アマガエルはいいました。

「わたしに三回キスをしておくれ」

ヘルムは、

(へえ、なんでぼくがそんなことしなくちゃならないんだろ)と思いましたが、近づいていってキスをしました。

二回目のキスをしようとしたとき、アマガエルは大きなへびにすがたをかえました。へびは、ぴかぴか光るつめたい目でヘルムを見つめ、口から毒をたらたら流していました。

それでもヘルムはへびにキスをしてやりました。

三回目のキスをしようとしたとき、へびはおそろしい竜りゅうにすがたをかえました。竜は、長いしっぽを水の中ではげしく動かし、口から火をふいていました。

それでもヘルムは、竜の頭をおさえつけて、キスをしました。

そのとたん、竜は、美しい娘むすめになりました。娘は、

「とうとうやりとげてくださったのね。これでもう、あなたとわたしはいつもいっしょよ。あなたは、なんでものぞみどおりのものを手に入れることができるわ」といいました。

ヘルムと娘は結婚けっこんしました。

天上の世界はすばらしく美しい所でした。妻つまはヘルムを庭やお城のすみずみまで案内あんないしてまわりました。けれども、ひとつだけ、ヘルムに見せない部屋がありました。

「この部屋にはけっして入らないでください。そうでないと、あなたにもわたしにもたいへんな不幸がおとずれますから」と、妻はいいました。

ふたりは長いあいだ楽しく幸せにくらしました。けれども、見てはいけない部屋の前を通るたびに、ヘルムは思いました。

(ぼくはこの主人じゃないか。どうしてこの部屋に入っではいけないんだ)

とうとうあるとき、ヘルムはその部屋のかぎを回して中へ入っていきました。これといつてかわったことはありませんでした。ただ、窓まどから人間の世界が見え、ふるさとの家が見えました。それを見たとたん、ヘルムはうちがなつかしく、悲しくなっていました。

ヘルムがもの思いにはずんでいるのを見て、妻は、どうしたのかとたずねました。ヘルムが「両親に会いたくなつたのだ」と答えると、妻は、深いため息をついていいました。

「では、あの部屋にお入りになったのね。それならしかたがない。馬小屋に白い馬がいるから、あれに乗ってお帰りなさい。でも、もどってくるときには、ご両親をつれてきてはいけませんよ。あなたひとりでもどつてくるんです。それから、ひとつだけ約束やくそくしてください。わたしが美しいことをだれにもいわないで。そうでないと、私たちにたいへんな不幸がふりかかりますから」

ヘルムは妻にかたく約束すると、馬小屋へ行きました。そして、白い馬に乗ったかと思ふと、馬は空高くまいあがり、雲をつきぬけ、風のようにとんでいきました。馬は、暗くなる前に、ふるさとの家の前におり立ちました。

両親はおどろき、はじめのうち、このりっぱな男がヘルムだとは信じませんでした。そこで、ヘルムはこれまでのことをすっかり話しました。でも、美しい妻のことだけはだまっていた。

ヘルムのことはすぐに村じゅうに知れわたりました。まもなく県の県知事がヘルムを食事にまねきました。県知事には娘が三人ありました。県知事は、ヘルムの乗ってきた白い馬や、馬具、着物がどれも上等なのを見て、ヘルムを娘の婿むこにしたいと考えました。そこで、娘のじまん話ばかりしました。とうとうヘルムは、

「じつは、私には妻がいるのです」といいました。すると県知事はいいました。

「でも、そのおくさんは、きつとたいした人じゃないんでしょう。でなければ、ここにつれてきたはずですからね」

ヘルムは、思わず、

「なんですって。妻は、あなたの娘さんを三人合わせたより千倍も美しいんですよ。妻の足のうらはあなたの娘さんの顔よりも美しいんですから」といいました。そういい終わるか終らないうちに、目の前に妻があらわれました。妻は、悲しそうにヘルムを見つめていました。

「わたしの美しいことをいさえしなければ、これからもいっしょにくらせたでしように。こうなった以上、あなたは、まっくらな暗闇くらやみの世界をめぐり歩いて、わたしをさがさなくてはなりません」

そういうやいなや、妻のすがたは消えてしまいました。

ヘルムは馬小屋にかけつけましたが、白い馬はいませんでした。そこで、悲しみにくれてうちへ帰り、両親にわかれをつけると、暗闇の世界をさがしに旅に出ました。

村から村へ、国から国へと、ヘルムは何年も何年も歩きつづけました。天までとどく木に登ったときはいた木ぐつよりも、たくさんのくつをはきつづきました。けれども、暗闇の世界がどこにあるか知っている人は、だれもいませんでした。

あるとき、ヘルムは、大きな暗い森を三日も歩きつづけているうちに、水車小屋に出ました。水車小屋にはおじいさんがいて、

「わしは、暗闇の世界の粉こなひききだよ。七百年の昔から、この森に人間が来たことはいちどもなかった」といいました。

「おじいさん、どうすれば暗闇の世界へ行けるのか、どうか教えてください」と、ヘルムはたのみました。

「暗闇の世界へ行くなんて、おまえにはむりだ。どうしたって行くことはできない」と、おじいさんはいいましたが、ヘルムが何度もたのむので、とうとうこういいました。

「あした、怪鳥かいちょうグライフがここにやってきて、たるいっぱいにつめた小麦粉こむぎこを暗闇の世界へ運んでいく。そのときいっしょに行くといい」

ヘルムはその晩、水車小屋に泊めてもらいました。そして朝になると、小麦粉のたるの中にかくれて、怪鳥グライフがやって来るのを待ちました。

まもなく、ザーザーと羽の音が聞こえ、怪鳥グライフがとんできました。グライフは、つめにたるを引っかけて、さつとまいあがりました。

しばらくとんだあと、グライフはたるを下ろして、どこかへとび去りました。

ヘルムは、たるからはい出しましたが、あたりはまっくら闇です。水のざわざわ流れる音だけが聞こえました。ヘルムは、よつんばいになって音のするほうへはっていき、やつのことで、川にかかっている橋を見つけました。手さぐりで橋をわたっていくと、はるかかなたに、かすかな光が見えました。ヘルムは、その光をめざして歩きだしました。けれども、いくら歩いても光のところに行きつくことができません。

ようやく光の近くまでたどり着くと、そこは暗い谷になっていて、女がふたり明かりをかざして歩いていました。女たちは、細い木の枝えだを集めていました。ひとりには妻で、もうひとりには小間使いの娘でした。

そのとき、妻がヘルムに気づきました。妻は大よろこびしてヘルムの手をとり、うちへつれて行きました。

妻は、ヘルムを部屋に入れると、いいました。

「このベッドでお休みなさい。わたしはこれから音楽かなを奏かなでに行かなくてはなりません。十一時になったら帰ってきてわたしの部屋に入ります。わたしの部屋はこの部屋のまうえです。そのあと何が起ころうとも、じっとしててくださいね。けっして動いてはいけません。口をきいてもいけませんよ」

そういうと、妻は行ってしまいました。

ヘルムはベッドに横になってじっと待ちました。時間が止まったように感じられ、妻は

もう二度ともどつてこないのではないかと思われました。けれども、ようやく妻が帰ってきたらしく、上の部屋で話し声と歩く音がしました。それから、あたりは静しずかになりました。

まっくら闇の中、とつぜん、気味の悪い音を立てて、ゆうれいたちが入ってきました。ヘルムは、妻にいわれたとおりに動かず、ねむっているふりをしました。ところがゆうれいたちは、ヘルムをなぐったりついたりしはじめたのです。ヘルムは大声でさげびそうになりました。けれども、がまんして、指一本動かしませんでした。

やがて十二時の鐘かねが鳴ると、ゆうれいたちはあとかたもなく消えてしまいました。

そこへとつぜん、妻が入ってきて、ヘルムの体じゅうのきずに薬をぬってくれました。痛みはすっかりなくなりました。それから、妻は、ワインやすばらしいごちそうを運んできてヘルムを元気づけました。食べおわると、ヘルムは横になってぐっすりねむりました。

長い時間がたつて気がつくと、妻が明かりを手にしてベッドのわきに立っていました。

「わたしはまた薪たきぎを集めに行かなくてはなりません。それが終わったら、音楽を奏でに行かなくてはなりません。でもあなたはここにいてくださいね。そして、十一時に私が帰ってきたのが分かったら、ベッドに横になって、じつと動かないでねむっていてください」
そういつて、妻は出ていきました。

ヘルムは、また長いこと待ちました。そして、ようやく上の部屋から妻が帰ってきた音が聞こえてくると、ベッドに入りました。

そのとたん、ゆうれいたちが、大声をあげて、ガタガタ音をさせながら入ってきました。ゆうれいたちは、きのうよりもはげしくヘルムをさしたりひっかいたりしました。ヘルムの体はきずだらけになり、まるでソーセージのようにでこぼこになりました。それでもヘルムは歯をくいしばってたえました。すると、ゆうれいたちは、大きななべを運んできました。なべには、にえたぎった油が入っていました。ゆうれいたちはヘルムの手足をつかんで持ち上げ、なべの中へ放りこもうとしました。

(もうだめだ)

ヘルムがさげぼうとしたしゅんかん、十二時の鐘が鳴りました。ゆうれいたちはかき消すようにいなくなりました。

こんどもヘルムは、ぬり薬とおいしいごちそう、上等のワインで元気になりました。妻

は、ヘルムが勇敢ゆうかにたえぬいたことをほめました。

「でも、一番ひどいのは三回目です。どんなことが起こっても、じつとがまんしてこらえてくださいね。そうでないと、こんどこそほんとうに、二度と会えなくなってしまう」
さて、長いこと待って十一時になると、ヘルムはベッドに入って、ゆうれいたちを待ちうけました。ところが、いつまでたってもゆうれいたちは入ってきません。

(へんだなあ)

じつと動かないで聞き耳を立てていると、窓の外に足音がして、おとうさんの声が聞こえました。

「ヘルム、ここにいたのか。わたしだよ。ずいぶん長いことさがして、やっとたずねあててきたんだ。戸を開けておくれ。ヘルム、返事をしておくれ」

まちがいなくおとうさんの声です。ヘルムの心臓しんぞうは、ドキドキと早鐘はやかねのように打ちました。

けれども、じつとだまっています。

しばらくすると、また足音が聞こえ、こんどはおかあさんの声がしました。

「ヘルム、そこにいるんですよ。わたしですよ、あなたを生んだおかあさんですよ。すぐ起きてわたしを中へ入れてちょうだい。さあ、早く、こっちへ来て、わたしをだいてキスしておくれ」

けれども、ヘルムは動きませんでした。するとまた、お父さんの声が、いつそう強い調子でさげびました。

「わかっているよ。わたしは昔おまえにつらく当たって、ずいぶんひどい目に合わせてしまった。だが、もうそんなことはわすれておくれ。この年とったわたしと、これ以上いざこざを起こさないでおくれ」

おかあさんの声もさげびました。

「わたしはおまえに何もひどいことはしなかったじゃないか。何を怒おこっているんだい。どうか、この戸を開けておくれ」

それから、ふたりで声をそろえてさげびました。

「早くわたしたちを中へ入れておくれ。このまっくらなつめたい外にいと、ここへ死んでしまうよ。けだものに食べられてしまうよ。助けておくれ」

ヘルムは、考えました。

(あれは、ゆうれいなんかじゃない。本当のおとうさんとおかさんにちがいない)
ヘルムが返事をしようとしたとき、鐘が十二時を打ちました。たちまち窓の外は静かになりました。

(ああ、やっぱり、ゆうれいだった。でも、いちどめよりも二度めよりも、こんどのが一番つらかったなあ)

そう思ったとたん、ヘルムは急に疲れ^{つか}が出て、ぐっすりねむりこんでしまいました。

目がさめると、あたりは明るい昼間でした。ヘルムは、りっぱな部屋の中にいました。ベッドのそばには美しい妻がほえんで立っていました。

ヘルムはとび起きて妻をだきしめました。

そのあとふたりがどうなったのか、わたしはまったく知りません。でも、ふたりがまたいっしょになれたんだから、それでもうじゆうぶん。

原話：『世界のメルヒェン図書館Ⅰ』小澤俊夫編訳 ぎょうせい刊

再話：村上郁